

放送人の会

No・47
2010・9.10

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

TEL&fax 03-3221-0019 E-mail info@hosojin.com

代表幹事 今野勉 編集担当 伊藤雅浩、鈴木典之、松尾羊一 事務局 佐藤真美子

「放送人」という言葉を作った人

代表幹事 今野 勉

知の巨人といわれた梅棹忠夫さんが亡くなった。

放送人グランプリの第1回受賞者の中に、梅棹忠夫さんがおられたのを記憶している会員も多いと思う。

第1回の放送人グランプリは、2002年であった。グランプリ受賞者は曾根英二さん（山陽放送）で、梅棹さんには、特別功労賞を受けていただいた。受賞理由は次の通りであった。

「『放送人』という言葉を生み出し、『放送人』という職業集団の文化的可能性について論じた40年前の先駆的な指摘が持つ今日的な大きさと深さに対して、同時に、ビデオテープの先駆的活動でアーカイブの文化的意味と必要性を唱導実践したことに對して」

梅棹さんが「放送人」という言葉を提唱したのは、1961年（昭和36年）である。大阪の朝日放送の広報誌「放送朝日」の特集「放送人の誕生と生長」の、その「放送人」という言葉は、同特集に



故 梅棹忠夫さん

寄稿した梅棹さんの「新人種の発生」という論文の中の「放送人」を使ったものであった。

放送人という言葉は、論文の冒頭にいきなり出てくる。

「放送人というのは、戦後に発生したあたらしい職業集団である。戦前には、こういうものはなかった」

で、どういう職業集団だ、と梅棹さんは思っていたか。

「ラジオ・テレビの番組制作者たちの仕事ぶりをみていて、わたしなどは、ときどきふしぎな感じにおそわれることがある。それはこういうことである。かれらは、まことに創造的であり、また、まことにエネルギーギッシュである。しかし、かれらのつくっているものが、かれらの創造的エネルギーの消耗に、ほんとうにあたいするものであるか」

ちよつと、どきりとさせられる切り出しであるが、梅棹さんのこの心配というものが、疑問というか、は、放送というものが1回こっきりで消えてしまうことを前提にしての話しだ、ということが、つづく文章でわかる。

これには、私も、あらためて、そうか、1961年でも、まだ、放送というものは、生であるのが常識として通っていたのか、と感慨にとらわれる。

「まったく、ラジオもテレビも放送してしまえばおしまいだ。どんなに苦心し

てうまくつくりあげた番組も、1回こっきり、あとになんにものこらない。そのために、何日も、何週間もまえから、ひじょうな努力をほらうのである。これはひきあうことだろうか」

こういわれると、また、どきりとさせられる。ナマかどうかは別として「あとにはなんにものこらない」というのは、VTRになつた今でもそのまま通じてしまふ指摘かもしれない。

「わたしがいつているのは、かれらがむだな努力をしているということではない。かれらがあれだけのエネルギー放出をやっている以上は、現代の健全な哲学にもとづいて、そのエネルギー放出を正當化するにたるなんらかの論理的回路が、かれらの心のなかには用意されているはずなのだ。それがなにか、ということなのである。この点をはつきりさせることが、放送人というものの内的人間像の、論理的側面をあきらかにすることに必要だろうか」

おまえら、何を考えて、あんなにムチヤクチヤな労働をしているのだ、と言われているような気がして、また、どきりである。

「ここで放送人が、こんな効果のはつきりしないような仕事はばからしい、と感じはじめたとしたら、それは、放送人の自己崩壊である」

そうだよなア、よくまア、自己崩壊もせずに、50年も放送人をやってきたものだ、と言いかけたら、お前さん、放送人バカになってしまつて、気がついていないだけだよ、と声が出た。

日韓中テレビ制作者フォーラム

中国・蘇州大会について

今年も、10月15日から19日まで、中国の蘇州市で日韓中テレビ制作者フォーラムが開かれる。

このフォーラムは、2001年、日本と韓国のテレビ番組制作者が、日韓を結ぶフェリー船上で意見を交換したのをきっかけに、日韓中3国の制作関係者が、放送のための情報交換、相互理解、共同制作の可能性を探ることなどを目的として、毎年1回、各国持ち回りで行われてきている。

今年の一つの節目となる10回目を迎え、中国の蘇州市で開かれることになった。

蘇州は、長江のデルタ地帯に位置し、上海市と接する、人口640万人余りの大都市である。運河に囲まれた美しい市街地は、「東洋のベニス」とも呼ばれ、市内には、ユネスコの世界遺産に登録された庭園などもある観光都市である。

産業的には、昔からシルク産業が有名だが、最近では、カメラやパソコンなど電子産業部門の生産も盛んである。

今年このフォーラムのテーマは「私たちの暮らし」。

3国からテーマ作品と自由作品合わせて4本ずつが参加し、番組の視聴やシンポジウムを通して、東アジアの今を生きる人たちの問題と、それに関わるテレビ制作者のあり方などについて、議論が深められることになる。

日本からの参加作品は、6月に選考委員会が決めた別表のような4作品が決

つている。

なお今年も10回目という節目にあたり、これまでより日程が1日多く、参加者がドラマ部門やドキュメンタリー部門に分かれ、制作者同士が議論・親交を深める時間が新しく設けられた。

また、参加者全員の投票をもとに選ぶグランプリなど、優秀作品の表彰とともに、今年はこのフォーラムを支えてきた功労者の表彰も行われる。

そして大会最終日は、残り少なくなつた上海万博を、参加者全員で見学する日程が組まれている。

日本からは、参加作品の制作者を中心に、30人あまりの関係者がこのフォーラムに参加することになるが、来年の日本大会を控え、この蘇州大会が、ぜひ今後の更なる発展につながるような大会になることを期待したい。(長沼士朗)

大会要項

① 日程 10月15日(金)〜19日(火)

② 場所 蘇州市・蘇州会議センター

③ 主催者側 中国テレビ芸術家協会

組織委員長 趙 化勇

執行委員長 鄭 秀雄(韓国)

④ 大会のテーマ 「私たちの暮らし」

(今を生きる)

⑤ 参加作品 各国それぞれ4本(テーマ作品2本、自由作品2本)

⑥ 参加者 約110名(日本・韓国30

35名、中国 40〜50名)

⑦ 表彰 出席者全員の投票で1位の作品を最優秀賞(グランプリ)とする。

その他の賞は3国代表で作る選定委員会

で決める。第10回記念功労賞を

出す。

【日本のテーマ作品】

NHKスペシャル「無縁社会〜無縁死 3万2千人の衝撃〜」(NHK)

NHKが全国1776の自治体に独自調査したところ、一昨年「身元不明の遺体」や「親族の遺体引き取り拒否の遺体」など国の統計上では現れてこない「無縁死」と呼べる「新たな死」が3万2千人に上るという事実が明らかになった。

なぜ誰にも知られず死亡し、引き取り手もないまま埋葬される人が増えているのか。無縁死までの軌跡を徹底的に取材し辿って行くと、日本がここ数年で「無縁社会」と言える社会に急速に突入している実態が浮かび上がってきた。番組では「無縁死」が増えている事態を直視し、大切な「いのち」が軽んじられている国、そして社会のあり方を問う。

△制作者V 高山仁(たかやまひとし)

NHK社会番組部チーフ・プロデューサー

ドキュメンタリー「田舎の「コンビニ」1軒のコンビニから見た過疎の4年間」(テレビ金沢)

石川県穴水地区は、廃線、閉校と過疎に歯止めがからず、住民の半数近くが高齢となつて、耕作放棄地が増えている。また、複合型大型店が田舎に進出してきため、個人商店は経営不振に陥り、交通手段のない高齢者は買い物に不自由している。

この番組は、お年寄りが拠り所として、1軒の商店の女性店主を主人公に、失われつつある人情の交流を描きながら、過疎の現状を訴える。

△制作者V 中崎清栄(なかさききよえ) テレビ金沢報道制作局ディレクター。

【日本の自由作品】

ドラマ「空飛ぶタイヤ」(WOWOW)

自動車会社を舞台に大企業によるリコール隠しを描く。コンプライアンスという言葉が叫ばれて久しいのに、何故不正は起こるのか。家に帰れば優しい家庭人が企業内で犯罪に手を染めるのは何故か。真相が隠され、企業の圧力に屈しようになりながら自分の信念に基づいて戦う主人公。登場人物のそれぞれの立場の責任と正義を丁寧に描写する。

△制作者V 青木素憲(あおきやすのり)

WOWOWドラマ制作部エクゼクティブ・プロデューサー

バラエティー「秘密のケンミンSHOW」(読売テレビ)

各都道府県ならではの「食べ物」「習慣」などにスポットをあてて綿密な取材を行い、スタジオで各都道府県出身のケンミンスターによってその「秘密」を公開する画期的な「地方をリス・ペクトする番組」である。

日本各地の「秘密」の奥にある驚きの歴史、それを知った他ケンミンの驚き、そしてその「秘密」がその地方にしかないことを知った当該ケンミンの驚き。それらの新鮮な驚きが全国の学校、会社、家庭で話題になっている。

△制作者V 中島恭介(なかしまきょうすけ) 読売テレビ東京制作部プロデューサー

蘇州案内

蘇州は春秋時代、呉の都がおかれた街で、臥薪嘗胆、呉越同舟の舞台です。古くから絹織物の産地として名高く、南宋時代と綿織物でも屈指の生産を誇っていました。上海から高速道路で約1時間。上海蟹で有名な陽澄湖に近いところです。

今ではシンガポールの協力で作られた工業団地に、繊維、精密化学、製紙、電子工業、機械工業などの工場が林立しています。上海に経済の中心は譲っていますが、豊かな地域なのです。

蘇州の旧市街は「水の都」、「東洋のベニス」と言われ、白壁と黒い瓦屋根の古い町並みの中の水路を小船が静かに行き交っており、歴史がそのまま凍りついたような古都です。世界遺産の名庭園がいくつもあります。写真の「退思園」、紅樓夢の舞台になった「拙政園」、中国4大名園のひとつとされる「留園」、蘇州最古の庭園「滄浪亭」、太湖産の奇石、太湖石で埋め尽くされた不思議な



水路を行く鶴飼の船。鶴は日本のものより大きい



名園・退思園

造形美の「獅子林」などがそうですが、そのほか歴史的な観光スポットがいくつもあります。太平天国の忠王・李秀成が王府と定めた「忠王府」、高さ78メートルの塔がある「北塔報恩寺」、地盤沈下で傾いて東洋の斜塔として名高い「虎丘」の雲巖寺塔、長さ317メートル、53のアーチを持つ唐代の石橋「宝帯橋」など。

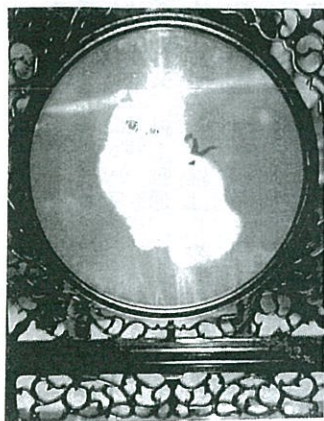
月落烏啼霜滿天 江楓漁火對愁眠
姑蘇城外寒山寺 夜半鐘聲到客船 張繼

この漢詩で有名な寒山寺は市街地のかなり西側になります。観光客が絶えません。最近では重さ108トンの鐘が新しく製造されて鳴っています。鐘を掲ぐ料金は1回2元。団体の場合は団体の入場料の中に含まれているとのことでしたが、つく人はほとんどいませんでした。この周辺には書のための筆、墨、硯などを売る土産物屋があります。いい品は少ないのですが、稀に名墨があるそうです。

団体の観光客が必ず案内されるのが「刺繡研究所」「絲綢博物館」(シルク・ミュージアム)「檀香扇廠」。それぞれ伝統の技術を駆使した見事な商品を展示即売していますが、値段は安くはありません。



「退思園」を作った任蘭生の像、高さ1m



↑刺繡をするお針子さんたち。若くて目がよくなければ出来ない。
上左、作られた刺繡。裏表同じ柄で、仕上げるのに4ヶ月かかる。←寒山寺

蘇州は現地では、苏州と書きます。8月15日現在、為替レートは1元＝12円ちよつとです。

(記・伊藤雅浩。写真も。2003年早春撮影)

蘇州の料理は淡水の魚介類を使ったものが名物で、宿泊するホテルの近くにも名店があります。「松鶴樓・山塘店」「王四酒家」が有名です。繁華街には小籠包、シューマイなどを店頭で売っていて、歩きながら食べられます。日本人の誰もが知っているのは「蘇州夜曲」でしょう。

1、君がみ胸に抱かれて聞くは 夢の舟歌 恋の唄
水の蘇州の花散る春に 惜しむか柳がすすり泣く
2、花を浮かべて流れる水の 明日の行方は知らねども
こよい映した二人の姿 消えてくれないつまでも
3、髪に飾るか接吻しようか 君が手折りし桃の花
涙ぐむよなおぼろの月に 鐘が鳴ります寒山寺
昭和15年李香蘭、長谷川一夫主演映画「支那の夜」の劇中歌、昭和28年映画「抱擁」の主題歌。西条八十作詞、服部良一作曲、歌手・渡辺はま子、霧島昇。歌謡曲の「支那の夜」「何日君再来」は要注意歌謡曲に指定されていましたが、「蘇州夜曲」は問題なしとされました。

海峡を船でわたる

大山 勝美

昭和7年9月、21歳の母は生まれて7ヶ月の私を抱いて、下関から船にのって海峡をわたった。

同じ年、満州国は誕生したばかりだった。朝鮮半島を北上し鴨緑江をわたった竜井という小さな街の日本人宿舎で父は待っていた。父と母は鹿児島を脱出し、一種の逃避行であった。父には婚約者が別にいたからである。

昭和11年に、奉天（現在の瀋陽）に移り住んだ。いまますこし、中国と朝鮮半島の人たちとの個人的な関わりについて記すことをお許しいただきたい。

父は朝鮮人中学校の教師をしていた。長男として実家へ仕送りをつづけていた父は、待遇のいい職業を選んだのだと、のちに語っていた。奉天の私たちのアパートには、盆暮れに父の生徒の父兄が挨拶にあらわれ、勤務先の中学校に、私は気軽に遊びに行っていた。体つきのしっかりした折り目正しい生徒たちが多かったように思う。

私と同じ年月を重ねた満州国が崩壊して、鹿児島に帰郷。それ以来じつくりと日本にむきあい暮らすようになる。したがって、中国と朝鮮の人たちには、ある種のなつかしさとうしろめたさが入り混じった感情が私の心の底にある。

戦後、中国を初めて訪ねたのは、1978年、文化大革命が終わって2年目の北京であった。飛行機が機首をさげて空港に近づくと、中国の黄色の大地の特有の匂いが機内にしのびこんできた。

「ああ、この匂いだ」私は思いきり鼻をふくらませた。砂をフライパンで炒つたようなすこし脂っぽい空気。体内の皮膚の穴もひらいて、旧満州に通ずるような匂いを吸いこもうとしているようだった。

中国は文化大革命後のテレビ番組の充実を図ろうと、徳間映画の森繁氏を通じて、局の何人かに訪中の誘いがあった。吉田直哉、山内久司、村木良彦、志賀信夫、堂本暁子といった顔ぶれで、北京、上海など主要都市のテレビ局をまわって、中国側のスタッフと懇談する旅を重ねた。このときの中国人の老朋友が、何人か現存している。

1983年、韓国MBCから声をかけられ3日間、ソウルで韓国の関係者を相手にテレビドラマの集中講義を行なった。作家の辛奉承氏や日本語の達者なライターたちも待ちうけていて、それ以降顔みしりのテレビ局の人たちもふえていった。2003年、済州島での日韓制作者フォーラムに招かれた。その3年まえに、仁川国際空港建設をからめて、日韓の若ものたちの交流を描いたドラマ「小さな橋を架ける」（山田太一脚本、山田尚プロデュース、毎日放送）の演出をてがけたからである。

中国からもオブザーバーとして30人近く参加していた。大会最終日、中国側から「ぜひ正式メンバーとして参加したい」と申し入れがあり、3ヶ国持ち回りで主催するという形で快諾されて今日に至っている。

第1回目はサッカーのワールドカップ共同主催をきっかけに、日韓の親交のあるプロデューサー、ディレクターたちが

「これからの日韓新時代、どう取り組むべきか」を洋上討論するため福岡から船にのって釜山にむかった。

木村栄文、村上雅通、志賀信夫といった日本側に、鄭秀雄はじめ韓国側数名という顔ぶれである。ところが議論白熱、ケンカ別れに近い状況で終わった。

話し合いは続けるべきと第2回の会場は対馬海峡のほぼ中央の対馬。腰を落ち着けての討論と番組視聴がようやく成功したそうだ。

鄭秀雄という人物ぬきでは、日韓中テレビ制作者フォーラムは10年続かなかつたであろう。3ヶ国をまとめる使命を果たすため、地上にやってきた宇宙人と自称するだけあって、誠実でパワフル。猛烈な反日家から一転親日家になったのは牛山純一氏の影響もあるかも知れない。

夫人は、朝鮮舞踊の名手。第3回済州島の歓迎宴で、鮮やかな披露があった。

ふりかえって、2回あった日本での大会のことが頭に浮かぶ。第5回の青山日本青年館での大会は、会場と宿泊所が同じ施設でコンパクトな運営ができ、日本側が用意した通訳陣のみごとな中国、韓国側はたかく評価してくれた。

苦労したのは第8回の福岡大会である。福岡には全国紙の西部本部と西日本新聞がある。新聞社の対峙と牽制の構図が、そのまま放送局に持ち込まれた感じがあって、関係者が肩を組み輪になつての実施にはほど遠かった。熊本の上雅通理事には、総括として随分と御苦労と迷惑をかけてしまった。

10年、国際的催しが続くと、空気もよどみ問題があらち首を出してくる。フォーラムは21世紀どうあべきか、使

命や役割をどうするか、3ヶ国とも総括しながら、大いに意見を出しあい話しあうことが必要である。

2000年の第1回目、船で福岡から海峡をわたって釜山へむかうとき、討論に参加した人たちは、新しい時代の日韓の放送制作者の連携について、それぞれの熱い思いで、心も身体もゆすぶられていたに違いない。

その原点の緊張と高ぶりの精神を大事にしなから、これからの日韓中制作者フォーラムのことを考えていきたい。

堀川恵子さん著書でも受賞

『死刑囚永山則夫』で今回放送人グラプリを受賞したフリーディレクターの堀川恵子さんが、テレビ作品と同時に上梓した『死刑の基準』永山裁判が遺したもの』（日本評論者刊）で、第32回講談社ノンフィクション賞を受賞しました。

裁判員制度で死刑判決への関心が高まっている昨今、「死刑の基準」作りを最高裁に迫った永山死刑囚とは何であったのか、司法の根幹を揺るがせ、「死刑」存続の是非を問いかけた一死刑囚の存在の重みだが、冴えた筆致で詳述されていて、一読深く考え込まれます。（堀川さんは非会員ですが、当会には知人やファンも多いので、話題として…）

『映像アーカイブと認知テクノロジー』

小倉一郎「放送人の証言」を巡って

日時・2010年7月17日(土)
午後2時〜6時

場所・東京本郷・東京大学福武ホール
司会と解説

石田英敬(東京大学大学院情報環境学
環長)

出演

今野勉(放送人の会代表幹事)

桜井均(東大情報学環特任教授・元NHK・会員)

三分一信之(日立システム知識ビジネス部長)

阿部卓也(東大大学院石田ゼミ研究生)

テレビのアーカイブ

作品から時代の軌跡を
顧みる「ドキュメンタ
リーワールド」が、妙
に固いタイトルに変わ
ったのは、この講座が
今回から東京大学大
学院情報学環の「知の冒
険」活動の一つに組み
込まれたことによる。
学術研究色が強まった
のだ。会場も、横浜の
放送ライブラリーから
本郷・東大の「福武ホ
ール」に移り、客筋も変わった。聴講者
はざっと60人、3分の1が当会会員、一
般参加者には専門の研究者も目立つ。



会場・福武ホール

今回の題材は、当会がこの11年続けて
いるビデオ証言記録「放送人の証言」(現
在150人を収録済み)を取り上げ、登

場する放送現場の「私たちの多彩な足跡
と業績をもとに、テレビと時代の関わり
を探る」先人の遺産「検証の試みだ。



今野勉氏

はじめに今野勉氏が「放送人の証言」
から見えてくるテレビ時代について語り、
活字化して共有財産にすることの意義を
強調した後、講座の組み立て役桜井均氏
が、モデル事例として取り上げたのは、
NHKドキュメンタリーの草分け的存在
の小倉一郎氏(08年没、79歳)の証言。



桜井均氏

小倉氏はラジオの録音構成からテレビ
の「日本の素顔」枠にかけて、主に60年
代、旺盛な活躍でNHK路線の確立に貢
献した。桜井氏は、例によって巧みな
可視化「編集で、政治的対立から経済の
高度成長に突き進む日本社会の激変の問
題点を炙り出しつつ、併せて小倉氏の人
物像と制作論を生き生きと眼前に甦らせ
てみせた。



故・小倉一郎氏

ぶつさら棒な映像で鋭く現実を切り取
る制作手法と、ロッセリーニの映画「戦
火のかなた」などを引き合いに出す小倉

氏の熱いリアリズム論に納得する。(余談
だが、会場にはお孫さんを連れ来た小倉夫
人の姿もあり、画面の夫君にほほえんで
おられた。)

以上を第1部とすると、第2部は小倉
作品の映像を用いた情報学環の「認知テ
クノロジー」展開の研究発表といえる。



右・石田英敬氏



左・三分一信之氏

当講座のコンシェルジュ(案内役)を
任じる石田英敬・学環長や、システム開
発に参加している「日立」の三分一信之
部長の熱心な説明によれば、このデジタ
ル・テクノロジーが狙うのは、散在する
映像や活字の膨大なコンテンツを、デジ
タル技術によって多面的に分析・分類・
蓄積し体系化することで、どんな需要に
も応じられる画期的な「新・百科事典」
機能を構築することのようだ。言い換え
れば、デジタル体系化された万能の「知
の宝庫」作り。



阿部卓也氏

その活用の一例を、大学院生の阿部卓
也氏が「タイムラインによる映像アーカ
イブの考古学」と題して発表した。小倉
作品『いのちの値段』(62年、日本の素顔)

の映像の一部が、後続の作品にどのよう
に引き継がれてきたかを系譜的に検証し
たもので、「樹木図」のように展開する
「認知システム」の中に、当の映像が

発掘文化財「的な扱いで位置づけられ意
味づけられていく。鮮やかな手際に、こ
れが尖端学問かと驚く一方で、次第に違
和感も膨らんでくる。率直に言うと、先
ず無菌の実験室での純粋培養風景が連想
され、やがて、血肉の通う「作品」とい
う固有の時代的生きものが無機的に解体
され、移植臓器として都合よく人工的に
利用されるに似た疑問も湧いてくる。作
品から切り離され断片化した映像や言葉
が、歯止めもなく「独り歩き」する怖さ
が思い浮かぶのだ。一つには、説明が流
暢すぎる(非日常的)日本語でよくわか
らなかつたこと、もう一つは、誰が、ど
ういう判断と責任で、意味づけし利用す
るのか、その基本の説明が欠けていたか
らでもあろう。

質疑の時、「認知テクノロジーなどと
言われると、老人はつい認知症を連想し
てしまう」と声があがったが、それを皮
肉と受け取られる雰囲気があったとは
いえない。デジタル化の大渦に突然巻き
込まれた、アナログ世代の戸惑いが垣間
見えたともいえる。

研究は緒に就いたばかりのようだ。「放
送人の証言」集が、多彩な職能集団のオ
ーラルヒストリーとして重宝され生かさ
れるならうれしい。期待も広がる。

桜井氏が新たに情報学環の研究陣に正
式に加わったと聞く。それを朗報ととら
え、ここはひとつ、気宇壮大な「知の冒
険」の進展を見守ることにしたい。

(鈴木典之 記)

恒例大座談会

2010年TV夏のジャーナリズム総括

A 「八月や六日九日十五日」という戯れ句がある。間に十二日（日航機遭難）を入れると、お盆という先祖供養と重なる「鎮魂の季節」のイメージが濃い。今年には戦後65年で来年が開戦70年だ。それで例年になく終戦記念、戦争関連の番組が多かったし、質的にも高いものがあつた。

B 上官や旧軍関係の組織の解散やらで気兼ねがなくなつたと沈黙の世代がはじめて口を開いた。日韓併合100年という節目も大きい。

C 政権交代しても変化の兆しは見られない。中国や第3世界の躍進のかげで日本の経済は停滞している。すべて閉塞状況なのだ。そんな状況から一步でも先に出ようという意識が今年の戦争番組の充実を生んだのではないか。

D 作る側が世代交代している。今テレビの現場で戦争関連番組を作っている人たちは戦後生まれの、戦争体験が全くない世代だ。今まで彼らは戦争体験を持つ人の話を忠実に記録し、再現するのだから、それが戦争の記憶を風化させないことだとの意識で番組を作ってきた。それが、ここ2、3年変わってきて、戦争の記憶、事実を歴史的なスパンの中に構成しなおす作業を始めている。それが今年はずきり出てきたのだと思う。

A いい制作者が次世代に育っていると思つていいのだろうか？

D そうだ。特にNHK。

B 戦争関連のアイテムはいろいろあるが、何故戦争に至つたのかを歴史的に見直す番組は確かに目立った。出来上がりは成功とは言えないが、半藤一利、鳥越俊太郎の「昭和33年文芸春秋座談会」リメイクもその一つだ。文春恒例の文士劇の仕立てで（笑）、有名人を現在の人物に配役し、戦後の座談会を再現する。有名人が役作り（資料を読み込み、情報を整理する作業）をする過程で、見る側に当事者意識が生まれる作用をうまく利用している。戦争に関して、指導者誰もが責任逃れに終始し、天皇裁可という最悪（最善？）の結果をもたらしたと伝えた。

C 個人的にはあの戦争は開戦、ミッドウェー、サイパン玉砕、3月10日東京大空襲、終戦と区切りたい。3月10日〜8月15日の東京はそれまでと全く変わった。流言蜚語が飛び交い、東條英機のこと「トージョー」と呼び捨てで「なにやつてるんだ」と罵つた。新聞はタブロイド版でめつたに読めないし、確かな情報はない。石川島造船所から旧制高校の勤労動員学生が焼け跡の銭湯に昼間入りに来る。湯舟の中で彼らは「この戦争は負けだよ」と語つた。4月以降は伝單が空からばらばら降ってくる。その内容を読んでも信じるでもなく、アパシーな気分だった。

D 番組を作つていた一つ前の世代は戦争に対して固定観念を引きずつていたと思う。新しい世代になつて戦争を考える因数が増えている。その因数とは中国、朝鮮との関係だろう。朝鮮、韓国、中国、

ソ連、ロシア、東南アジアの歴史と現在を非常に冷静に克明に見ている。

A 明治維新以降いち早く経済発展を遂げて強国になった日本、そして被害を受けた朝鮮、中国という各国との力関係が変わつてその構図も変わつてきたのだろう。

B 被害者の立場だけでなく、加害者の立場を描くようになった。被害者であると同時に被害者だ。国民一人一人も加害者じゃないか、という観念の作品が急増した。われわれの世代は戦争の被害者だという情報ばかり受け取つてきた。加害者であることはわからないことはないが感情的に切り替えられなくなつていた。それを乗り越えて番組を作るのは今の若い世代だろう。

C 今の制作者たちはずっとテレビのドキュメンタリーで戦争ものを見てきた。そしてその欠点も見えてきた。今彼らは湾岸戦争、イラクなど自分たちの射程の中にある戦争とあわせて作つている。

D 昨年の「日本海軍400時間の証言」が皮切りになつている。「やましき沈黙」という言葉は凄く印象的な言葉だった。

A 倉本聰のドラマ「帰国」でも流用していた。

B その「やましき沈黙」が今年かなり破られていた。それを一番強く感じたのは「玉砕」だ。アツツ島の玉砕は昭和17年。小学校のときの鮮烈な記憶がある。新聞を丹念に読んだ記憶もある。今回の番組には驚いた。

C 聖域に踏み込んだ感じかな。

D 棄民ではなく棄兵だ。それが大本営の保身のための方針だった。戦死者320万人のうち、民間人が30万人、軍人2

90万人、だがアツツ島までは兵士の戦死者は20万人以下だった。アツツ島以後大本営の棄兵方針によって兵士の戦死はどんどん増える。この方針がなければ戦死者は250万人減つていた。

A アツツ島は玉砕ではなく、全滅であり、ガタルカナルは転進ではなく退却だと庶民レベルでは語っていた。タマエとホンネというより、大いなる幻影としてのタマエを支えるリアリティーとしてのホンネとして語っていた。「玉砕」を見ると「全滅」ではなかった。ホンネも裏切られたわけだ。

B 「棄軍」という言葉を使っていた。

C 「ゲゲゲ」の水木しげるもズンゲン前線で玉砕したことになっていて、帰隊してからひどいめにあつた。

D ハイビジョン特集「満蒙開拓青少年義勇軍少年と教師それぞれの戦争」では少年達は関東軍に裏切られる。関東軍は自分たちが逃げるために開拓農民を前線に押し出した。教師は今も「生徒達に顔が合わせられない」と言い、元少年義勇軍は「中国人を殺した」と証言する。関東軍の卑劣さ、無責任はこれまでも言われてきたが、沖縄と同様、軍は国を守ると称して、決して国民を守らなかつたのだ。

A 「証言・兵士たちの戦争」は何本もあつて、いずれも深夜に放送された。本も出版されていてなかなか読ませる。10日の「ベラボートの特攻兵士」を食い入るように見た。震洋あるいはマル4艇と呼ばれていた舟で、目的のところへはとても行けない舟だ。外洋に出るとまったく機能しない。大波で沈没してしまう。証言していたのは現在80〜81歳の人で、当

時15〜17歳の少年兵だ。彼らがどんな絶望的な気持ちでこの舟に乗ったのか、痛切に語っていた。

C オーストラリアに1艘だけ震洋が残っていて、その艇の右舷にはS U I C I D E B O A T (自殺艇)と書いてあった。

D 12日、NHKハイビジョン・プレミアム8「澤地久枝・昭和に向き合う」は、澤地さんがいう「非業の死」のない世の中にしたい、という思いを語ったもので、心臓病と闘いながら平和を希求する作家の活動を回顧した秀作だった。「非業の死」は日本人300万、アジアで1000万といわれる戦争犠牲者、加えて第2次世界大戦での世界中の犠牲者ばかりではない。現在も生死不明のまま放置された100歳以上の老人、母親に放置され餓死した大阪の2人の兄妹までも含む多くの「非業の死者たち」の生前の姿を明らかにし、その死のありさまを丹念に跡づけ、伝えることがマスコミの使命だと実感した。

A 9日の「ヒバクシャからの手紙そしてヒバクシャへの手紙」は広島、長崎の生中継映像の中で、生存者からの手紙によって多くの「非業の死」の実相を伝えるもの。毎年放送されている企画で、今年もヒバクシャへの手紙という形で、われわれは被爆にどう向き合うべきかを一般視聴者に問いかけた。ゲストの大石芳野がよかった。毎年続けていることに敬意を表したい。

B 「戦地からの手紙」あなたは知っていますか? もやはり手紙による構成。埼玉平和祈念館の活動や、大学ゼミの若者参加の活動など、若者へのメッセージを

意識した構成だが、私手紙による妻へのメッセージ、我が子にあてた手紙の文面や残された本人の写真などに圧倒的なりアリテイーがあった。戦場にあつて兵士たちがいつも家族を気にしていた事実にあらためて気づく。継母にあつた特攻隊兵士(安原正成・18歳)の最後の手紙、「母上お元気ですか。長い間ありますがどうぞいりました。6歳から育てていただきながら、お母さんと呼べずに申し訳ありませんでした。ありがたい母、尊い母、おれは幸せだった。死ぬ前に大声で母と呼ばせていただきます。お母さん、お母さん——」。非業の死にあつて、天皇陛下万歳ではなく家族を思つて死んでいった事実を忘れてはならない。

C ドラマ「15歳の志願兵」(作・大森寿美男)では「何のために死ぬのか」と言葉が言葉を呼んで催眠術にかけられたように全員が志願する瞬間が来る。私自身が同じ状況にあつたらやはり言葉を信じて自分を呪縛して死ぬしかないだろうと思う。

D このドラマは旧制愛知1中に保存されている当時の生徒文集を生かしている。ヴェルレーヌを語らるるシーンも文集にあるようだ。「きけわだつみの声」によればあのころは「武士道とは死ぬこととみつけたら」とかドイツの「エツカーマンとの対話」とか大学生たちは観念的な「自由」を考えていた。ドラマでは分かりやすくするために「巷に雨の降ることく」を入れていた。

A 昨年は「サカイタイゾー」にランボアの詩がでてきた。当時の青年は堀口大學訳のフランス詩を読んでいたので。彼はアテネ・フランスの学生だった。

B 愛知1中は自由な気風で(先生も生徒も通達を全く問題にしていなかった。しかし上からの通達が何回も繰り返されて、空気が変わりそこへ配属将校の演説があつて学校は追いつめられて行く。

まず国民的な熱狂が作り出される。その熱狂が作り出されるともう誰も抵抗できない。そこを突にわかりやすく描いていた。あれは非常に恐ろしい。

C 主人公の少年が凍々しくて(笠井、藤山)よかつた。そして子どもを失つた軍人の後添い、夏川結衣がとりわけよかつた。無学な自分には子どもが残した日記が正確に理解できないから、と生残つた子どもの友人に朗読を頼む夏川の表情がやるせない。

D 夏川が「私に学問があつたら、あの子の気持ちを理解して、死なせずにすんだのでしようか」と自分をせめる。その友人の少年は「私たちは学校で死ぬと教わりました。学問がなかつたのはこの国です」と答えた。戦中戦後、この手の話はあふれていた。

A 早坂暁の「花へんろ」は旧制松山中学だが、配属将校が講堂に集めた生徒に「目をつむれ」と命じ、「そして志願者は手を挙げろ」「ほら一人、三人、六人、どんどん手があがつたぞ」というシーンに通じる。「あれは本当にあつたことだ」と、海兵を志願した早坂さんはドラマで再現したという。あざといやり方に母親(桃井かおり)が学校に抗議するシーンは感動的だった。

B 話を戻すが、やはり上官や年長者の覆いが意識の上でなくなつたのが大きい。ドラマ「帰園」で長洲剛が上官を訪ねて行くと、上官は車椅子で迎え火を焚いて

いる。あの上官が「やましき沈黙」を守つたために俺はこれまで地獄の生を生き長らえさせられたのだ、と自虐的に笑う。あのシーンには、よくこんなことが言えるものだ、そんなことでは許されないよ、と感じた。あれはやりきれないシーンだ。

C 覆いがなくなつたのは「サカイタイゾー」がそうだったが、捕虜になつて敵国に調べられて、という物語はNスペースのダイレクター中田整一が「トレーシー」(NHK出版)という本に書いている。

あれを読むと覆いがとれると喋り始めるケースがいくつも出てくる。硫黄島では捕虜が栗原中将の居場所まで喋っている。D 「犯人は親切でした」と、誘拐された人質が犯人と親しくなるケースも似ている。日本人の人の良さなのかな。「トレーシー」によると、こんなに自軍の情報をべらべら喋る捕虜は日本人しかない、とアメリカ側が驚いている。同じメンタリテイーだろう。

A 「死して虜囚の辱め」の戦陣訓のホネが過度の米軍協力。サカイは戦争の早期終結を願つて協力したと、番組は解説したが、戦場心理なら大岡昇平の「レイテ戦記」に詳しい。

B 戦後、マッカーサーを解放軍司令官と考え、「民主主義、民主主義」とすり寄つたのも似たようなものだ。

C それは日本人独特のメンタリテイーではなく、人類共通のものなのかもしれない。シベリヤ抑留者は生き延びるために仲間を売っていた。

D Nスペース証言記録「シベリヤ抑留」だが「暁に祈る」の吉村隊長が出てこない。シベリヤ抑留者は100以上いるんなら収容所に散らばつていて、さまざまなか

スがあつたらしい。

A ドキュメンタリー「封印原爆報告書」

でも、日本側調査団が集めた原爆資料を全部アメリカに渡してしまっている。730部隊の国際法違反に目をつぶって貰うため医療隊が取引したということだが、この取引について「二つの国の利害が一致したのです」と整理してコメントしていたのには違和感を感じた。

B 大岡昇平の「レイテ戦記」3巻は丹念な調査から生まれた。彼はミンドロ島で捕虜になったが、レイテ島はすぐそばの島だ。レイテは大本営とつながっているのだが、その組織が崩壊して行く。その過程を大岡昇平は部隊別に一人一人の兵士に会って記録している。彼はあそこで日本の国の正体を解体する国軍の実態から明らかにしたかったのだ。ナポレオンの露仏戦争敗退に従軍したスタンダールの「日記」が底流にあつた。

C 聞き取りの資料と防衛庁が保存していた資料を彼は克明に照査した。

D 最初に冗談めいて民主党政権になつたからと言ったが、やはりそれはあるのではないか。言論の自由、表現の自由といつても年老いた証言者たちに自民党政権は怖いという恐怖心は消えなかつた。制作者たちもその気分は感じていたし、証言する戦争体験者たちもなんとなく感じていただろう。

A その関連で、戦後のGHQの言論統制、フランク馬場の証言を扱った番組、**ETV特集「戦後のラジオ」**は面白かつた。

B 一昨年、戦時中のマスコミがいかに率先して国民を戦争へ駆り立てたかを描いたドキュメンタリーがあつたが、その逆の動きについての反省としてNHKは

戦後のNHKのあの番組を作つたと思う。

C 「公共放送は政府の御用放送ではない」と言つたガネットこと丸山鉄雄さん。あの人は面白い人だつたようだ。

D 多くの戦争番組があり、その何分の一しか見ていないが、ドラマもドキュメンタリーもつまらない番組はなかつた。戦後いろんな災害があつたが戦争はやはり凄い。

A 「15歳の志願兵」から「帰国」までの間に、兵士はいかに死ぬことの諦念を得るまで、葛藤の内なる地獄がある。それは一つは「きけわだつみのこえ」の世界で、上原良治の「今日また一人の自由主義者が死んで行きます」という書簡がよく引用されるが「帰国」はその心情を受け継いでいる。

B 岩波新書に「戦没農民兵士の手記」(本牟羅実著)がある。戦没学生と違つてこちらは歌曲曲か軍歌の一節のような記述が多い。戦争の記録には階級の反映がある。戦死者の8割以上は餓死、病死で、犬死、無駄死なのだ。虫けらのように死んでいった兵士たちはまだ十分には描かれていない。

C 「帰国」が靖国神社を受け入れているのは何故だろうか?

D 「英霊」と言っているからだ。倉本聰は靖国神社が好きなのだ。(笑)

A 靖国はA級戦犯を合祀したから問題なので、私の子ども時代では靖国に祀られることは美しいことで、村の鎮守様と似ていた。宗教ではなく、あそこに祀られることで死者も生者も納得したので。しかし、靖国は国教になり、政治性の強い磁場を帯びた場所になつた。

B 靖国の遊就館り展示物は戦争賛美で

胸糞が悪くなる。英霊を祀っている、だけではすまない。

C 今年に限らないが、アメリカのナショナル・アーカイブの資料に基づいて作つたものが非常に多い。ETV特集「よみがえる戦場の記憶」、NSペ「封印された原爆の記録」がそうだ。この資料を使うには物凄い労力があるが、凄い宝の山だ。日本にはナショナル・アーカイブスが存在しない。

B 日本では戦後あらゆる資料が焼かれた。役所の資料を焼く煙でお天道様が赤く小さくなつたという。皇居の周りは戦後20日くらい文書を焼いていたのを覚えている。残つた資料は米軍が押収した。

C いや、その後の戦後の資料についても保存のシステムが確立していない。核の密約が佐藤信二のところから出てきたのはその象徴だ。

D ソ連ですら記録はきちんと残されている。

A NHKは「A to Z」で外務省に記録がほとんど残されていないことを報じた。

B 国立公文書館もあるのだが、保存の仕組みと公開のルールはまだまだだ。もっと一般の人がアクセス出来るようになる必要がある。

C 日韓100年についてはNSペの「日本と朝鮮半島」の5回目が見えたえがあつた。パクチョンヒと岸信介を追つていて、パクは満州の士官学校の出身で岸信介と深い縁がある。二人のしたたかさの裏側が見えた。「日本と朝鮮のこれから」も珍しく内容のある議論が進んだ。

D 結論は出さなくてもいいのだが、相手に言われてよくわかつたところがある。日本の歴史教育は現代史をあまりやらない。韓国人の若者は、日本の若者は「ソナ」しか知らない、と歴史を知らないことに驚く。

A 韓国で一番有名な日本人は伊藤博文、日本で一番有名な韓国人はヨンさま。あのギャップには考えさせられた。

B 今年の広島はアメリカのルース大使とパン・ギムンで注目されていた。「広島原爆犠牲者慰霊式典中継」でパン・ギムン国連事務総長の演説を途中で切つたのは大エラーだ。あの途中カットには抗議の電話が殺到したそうだ。広島市長、菅総理の挨拶がそれぞれ長くて押し切つたことはあるが、次第は分かつているのだから、高校野球をどうするかあらかじめ考えられたはずだ。高校野球は教育チャンネルでやれるのだから。

A 事前に決められていた編集方針を知りたい。もともと菅総理の挨拶で終わりと生中継マターで決めていたのではないか。

B 核の問題はオバマのプラハの演説で「核兵器のない世界」への方向が示された。パン・ギムンの演説はそれを踏まえたものだったはずだ。中継の映像では彼が演説の前に口で練習していた。相手が合が入っていたようだ。今年のNPPT会議、核不拡散条約見直しの会議では当初議長提案を核保有国である常任理事国が拒否し難航していたが、最後に何とか形にしたのはパン・ギムンの功績だ。

C 民放では地元以外式典中継をしていない。夕方のニュースではルース大使が出席したが挨拶しなかつたことについて解説があつた。秋葉市長から菅総理への「核の傘」からの脱却の要請について、菅総理が「その考えはない」と表明した

ことについてはワイドショーで「当然だ」とのコメンテーターの短い発言があっただけだ。

D 8・15が放送日の「サンデーモーニング」が4分余の終戦の詔勅を全文朗読した。これって初めてじゃないのか。

A 若者の話に戻したい。「日本のこれから」とも考えよう日韓の未来、「色つきの悪夢 カラー化された第2次大戦」、「爆笑問題の戦争入門」、池上彰の「戦争を考えるSP」などの番組は若い世代へ戦争をどう伝えるかにチャレンジした番組だ。この中で「日本のこれから」は演出上の工夫がみられ出色。年々日韓の壁が薄くなったことを感じる。

他のお笑いタレントが多く出演して「へえ!」と言っていた。池上彰は分かりやすいのは結構なのだが、「日本を守るために満州国を作る。そうした政府の狙いもあつたんですよ」「日本は資源を求めて南方を目指す。それに反対するアメリカは経済封鎖で日本に対抗する。このため日本は無謀を承知で戦争を始めたのです」と池上がクールな水平思考で整理すると若者が素直にうなずいて納得してしまう。戦争の整合化でいいのかと思う。

このか、の解説は()に面白かった。ロシアが今年から戦艦ミズリー上降伏調印の9月2日を終戦記念日に決めたこともあれで知った。

B 池上のやり方はこれまででない。NHKはいろんなニュース解説をやっているが、一人のキャスターにあれだけ長く分りやすくやらせたことはない。

C 戦争報道のカラー化は、記録映像を記憶映像化する。歴史の断片を肉片にする試みだ。

D NHKの「映像の世紀」を思い出す。ベルリンが炎をあげて燃えている映像を見ると、「往生要集」の絵巻にある地獄や不動明王の炎を思う。浮世絵はカラーだ。中国の水墨画と違い、日本人はもともとカラーのリアル感を楽しむ文化をもっていた。

D 池上のやっていることは一種のワイドショーなのだが、ワイドショーが現在進行形のニュースの断片を瞬間的に料理するのに対し、池上は「そもそもなんであつたか」を解説してその欠点を克服した。あれはワイドショーの欠点を克服したワイドショーだ。

A 終戦は何日なのか、8月15日ではな

A あれは原理的には色を電氣的に塗るもので、モノクロの映像をコンピュータで分析すると、ここはこの色だろうと推定できる。実際の色はコンピュータが持っている色をその部分にあてはめて行く。

B 「あさイチ」では気の毒な存在の柳沢アナ(笑)が「色つきの悪夢」では、「アメリカ側の戦場の映像は戦意高揚のために意図的に撮影され編集されている」、ときちんと述べていた。

C 誰がどんな意図で撮ったかは重要で、E TV特集の「よみがえる戦場の沖繩」の映像は明らかにアメリカ軍が自分たちのために撮った映像だ。そうでなければ仕立てられた収容所の日本人男女の結婚式の映像はでてこない。そのためコメントが逆に非常に優れている。

D 戦争が終わると「パラマウントニュ

ース」が「プリティッシュ・()、ルドニュース」が入ってきて、アメリカ映画の上映の前に見た。戦場のモノクロ映像だが、そのときは何気なく見て、今カラー化されると映像自体に主張があると感じる。

C 「徹子の部屋」に加藤武が出て東京大空襲の話をした。燃えている中をおばあさんを大八車に乗せて歌舞伎座の前を逃げた。この状況を歌舞伎の声色を交えてやる。これが実に面白かった。歌舞伎の声色がやれる俳優は今ほとんどいない。

D 民放のドキュメンタリーは少なかった。NTV系が2本。

「平和公園で眠る故郷」CGで蘇る記憶の町は若い女性ディレクターの制作で感じはいいのだが、30分と短い。

「いじめていめんそーれ 故郷へ進軍した日系米兵」は少年期を沖繩で過ごしたハワイの日系人が米軍の沖繩上陸作戦に通訳兵として参加し、ガマ(壕)の中から、潜み隠れていた沖繩の民間人の救出に当たった物語。ここでも日本軍から死を強制された沖繩の民間人の不幸が描かれていた。「いじめていめんそーれ」は「出てきてください」という、ウチナーグチ。

A B Sジャバンの「太平洋戦争・65年の現実、どうしても伝えておきたい1枚の写真」は台湾・花蓮港・特攻隊の写真で、台湾兵の話。

B 「生命(inochi)孤高の画家吉田堅治」は元特攻隊の画家で、かつては真っ黒な絵を描いていたが、あるときから金色・銀色を使うようになり、パリ画壇で有名な画家になった。シベリアの画家には黒い絵を描く香月泰男がいる。

C 彼は中学の教師をしていて、戦後30年くらい後に一念発起してパリへ行った。

そして何年かして日本へ帰り、金箔、銀箔を見て絵が変わった。

D 吉永小百合の朗読は今年もやっていたが、当初の頃の純な感じからショーアップされたものへ変わった。祈りによる反戦では限界なのか。

C 現在進行形、あるいは直近の戦争についてはアフリカにいろんな形がある。「アフリカン・ドリーム」はそんなアフリカの各国の状況を多角的に描いた。今や3つの国に分かれたソマリアの兵士たち、ナイジェリア河口デルタ地帯の油田による汚染、労働力不足を越境者たちの低賃金労働で補おうとする南アフリカ、その越境者たちを襲う強盗、ダイヤモンド・トレード・センターの開設に成功したボツワナ、そこに働く若い女性の高い給料；それぞれ目新しい情報で面白かった。

D リベリアの内戦はいまだに続いている。ルワンダの民族紛争は周辺の国にゲリラ的な残っていて解決したとは言えない。アメリカが撤退したイラクがどうなるか、ネパールの内戦は、と世界にはまだまだ紛争はつきない。紛争地域の取材は危険で困難かもしれないが、制作者の一層の努力に期待したい。

A ではこのへんで：

座談会・出席者 伊藤雅浩、隈部紀生、河野尚行、鈴木典之、藤久ミネ、堀川とんこう、松尾羊一、(文書参加) 渡辺紘史

8月20日(金)午後3時～5時
於・放送人の会・事務局

1枚のラジオ番組表から



武本 宏一

この夏の猛暑に閉口しつつ自宅で書類を整理していると、古いファイルの中から色褪せたTBSラジオの番組表が出てきた。日付は昭和44年6月とある。これはこれは…。

表はごく当り前の、曜日別の番組時間表であるが、裏返してびっくり。なんと当時のラジオ制作部員たち約50名の顔写真が、7段にもわたりパノラマ状にレイアウトされて掲げられているのだ。その真ん中辺りで気取ったポーズでキューを出している私もある。

一体誰が、何の目的で、出演者などではなく本来ウラ方のディレクター達の写真などを並べたのだろう。ふと上段に目をやると、「私たちがTBSラジオを制作しています」のキャッチコピーがあった。そうか、そうだったのか。

近頃ドライブで道の駅などに立ち寄ると、採れたてのカボチャの傍らに、「この野菜を作ったのは私です」なんて、陽焼けたオバサンの顔写真が並べられていて、うん、この人なら安心だな、とつい買ってしまった。あれだ。

つまり、あの当時、今から40年ほど前までは、ラジオは出演者やパーソナリティーなどよりも、番組の創り手の個性や腕前の方を、ずっと頼みにもし、また売りものにもするのが当り前だったのだ。

私自身、生意気にもラジオマンとしての自分の使命を「音を武器に、時代を証言し、表現すること」と規定していた。伝え、と同時に、創る。それがラジオマン。

古い番組表には、同じ思いの先輩や同僚たちが手塩にかけた番組が、朝から5分刻みにギッシリとひしめいている。その数、1日50番組余り。

さて、今どきのラジオはどうだろう。パソコンでTBSラジオのホームページをみてみると…。

そこには制作者ならぬ、数人の人気パーソナリティーたちの笑顔が並んでいる。朝から、生島ヒロシ、森本毅郎、大沢悠里、小島慶子、荒川強啓…。たった5人のワイド番組でもう夕方になってしまふ。そして、ナイター、いくつかの箱番組。「小沢昭一的こころ」など昼間の帯番組を加えても、せいぜい15番組ほどで1日が足りてしまう。

パーソナリティーに「オンブにダッコ」のこの編成、しかしTBSラジオはこれで成功を収めた。ビデオサーチによる各4半期毎のラジオ聴取率調査で、TBSはこの夏までに、巨人のV9どころかV53を達成…。つまり、この10数年、聴取率トップの座を独占しているのだ。

実力あるパーソナリティーを最大限に生かした編成の勝利、それは勿論認められよう。

しかし例えば今年の終戦記念日…。テレビではどこも「帰国」はじめ話題作を制作放送した。

一方、NHKを除く在京の民放ラジオマンはと言えば、そうした記念番組は一切なし。相も変らぬ「いつもの定食」しかテーブルに乗せてくれない。

時代を証言し、表現すべきラジオマンはどこへ行つた。いま一度タイムテーブルに制作者、創り手の顔写真を掲げて勝負するラジオ局は、現れないものだろうか。(つづく)

短期連載

赤字会社走る



大類 啓

在籍局山形放送の関連会社で番組制作会社の「東北映音」(山形市)に代表取締役社長として出向した当座は、まだそれほどではありませんでした。だが、「あなた また戦争ですよ」が放送人グランプリを受賞した05年を境に事態は一変します。

翌年、ついに赤字転落。すでに平成不況は長期化し、民放地方局もデジタル競争に突き進んでいました。振り向けば社員38人の顔と顔。局がちよっと蛇口を締めればたちまち干上がる制作会社の現実さて、どうしよう。

「こりゃあ、自分の足で立つしかあるまい」「局はあてにならない」と腹をくく。新たな仕事を探し、新たな収入を求めよう。こうして赤字解消に向け戦線拡大作戦に走り出しました。

一番槍は映画の巡回上映会でした。山形は「藤沢周平」小説の映画化や「国際ドキュメンタリー映画祭(余談ですが、ある年村木良彦さんがフラリと現れ、地酒を酌み交わしたことがありましたが、

お会いしたのはこれが最後でした)などで映画界を自負する向きがありますが、実際は映画館過疎現象なのです。映画館があるのは35市町村のうちわずか4市町、4館だけ。加えて山形県は名だたる高齢化県。バスや鉄道は不便の上なく、年配者が映画館に出掛けるには若夫婦の車に頼らざるを得ません。その若夫婦は判で押したようにどこも共働き、ときいてる。つまり、年配者は映画難民なのです。

「じゃあ、無館のマチャムラで映画をやるうじゃないか」。ゲタばきで気軽に出掛けられる〇〇会館や公民館ホールはどこでも映写装置がほぼ整っている。作品は独立系にしよう。配給会社に見られるような面倒な交渉ことは少ないし、仕入れ値もそう高額ではない。作品選びは商売柄、そんなに難しいことではない。後はチケット販売網の構築とPRの浸透だ。07年、赤字2年目。映画作戦のスタートです。こけら落としは板倉真琴第1回監督作品の「待合室」。出演は富司純子、寺島しのぶ、初の親子共演。上映会は県内17市町村。結果、入場者は高齢者中心に計1万6千人。当初予想を上回る上々の入りでした。映画難民、制作費難の映画人、そして赤字会社の三方一両損ならぬ一両得でした。

もがきの中から生まれた映画作戦は以後、赤字解消に向けた一本の柱となりました。小規模な上映会も取り込んで経験を積み重ね、その先には映画界の老舗「松竹」との出会いが待っていました。もはや手負いの熊に怖いものなし。戦いは続きます。(以下、次号)

(東北映音株式会社・相談役)

第21回放送人句会

◇平成22年7月14日(水)

◇於：赤坂・麦屋

◇選者：星野高士

◇出席：伊藤視郎、上村暁蛙、荻野慶人、中島丈博、新村もとを、橋本きよし、林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、西川阿舟(12名)

◇不在投句：鶴橋康夫、豊田まつり、山泉ぼん太

◇兼題：夏の夕(夏の夜)、冷奴、エキストラ
トラ

【星野高士特選】

冷奴朱塗りの箸の先細く きよし

氷菓子エキストラにも行き互る 備後

蛇出づと飛び上りたるエキストラ ぼん太

落武者ぞ夏蔭狭きエキストラ 慶人

夏の暮盛塩はまだ踏まれずに 備後

蹴球の九十余分真夜の夏 まつり

夏の夜の罪ある白きワンピース とんこう

世渡りも浮き沈みあり冷奴 馬笑

【星野高士選】

夏の夜猫と静かに眠りけり 視郎

老いの箸ふるえを添えて冷奴 馬笑

日本のゴールに湧けり夜半の夏 阿舟

冷奴大言壮語薬味とし もとを

濡れ手拭肩にして喰ふ冷奴 丈博

エキストラなりし伝説眉涼し まつり

過ぎたるは捨てていなして夏の暮 康夫

橋板を踏む下駄の音冷奴 暁蛙

阿夫利社に詣でたる後冷奴 阿舟

色街に広小路あり 〃 〃 もとを

エキストラ汗吹く死体の赤ら顔 とんこう

エキストラ風鈴賣りがよく似合ひ 丈博

野馬追やエキストラ武者突進す ぼん太

一丁を分け合つて冷奴かな 阿舟

夏草に伏す甲冑のエキストラ 備後

冷奴箸を逃れて水に浮く 治美

相逢うて吉原つなぎ冷奴 丈博

ラストカット内トラばかり納涼船 とんこう

しがらみの日々は背にあり冷奴 きよし

路地裏にピアフ流るる夏の宵 暁蛙

途絶えたる話のつなぎ冷奴 もとを

炎帝にベントツ待たせてエキストラ まつり

待ち時間午睡に落ちるエキストラ 治美

古都のバスエンストしたる夏の宵 もとを

夏木蔭けだるげに待つエキストラ 馬笑

願満ちて大山不動の冷奴 暁蛙

遠き日の古傷愛し冷奴 慶人

細帯のあるかなしかの夏の夕 康夫

猫もどるさて鯉節と冷奴 暁蛙

葉の裏に空蟬ゆれる夏の夕 馬笑

京町屋奥の座敷の冷豆腐 きよし

夏の通夜幽霊連れて戻る闇 とんこう

夏の夜アフリカの地図暗記する 視郎

夏の宵宴して計を受け容るる まつり

老いの箸ふるえを添えて冷奴 馬笑

ハンカチを振るエキストラ二百人 阿舟

離れ屋に灯の入りたる夏の夕 ぼん太

倦むこともなく独り居の冷奴 備後

夏の夜の露天に埋もれ朱の鳥居 きよし

エキストラ群れ死に朱泥の宵 月

夏の夕深く断つ後ろ髪 きよし

エキストラ五千大阪夏の陣 慶人

【選者 吟】 星野高士

盆芝居台詞は要らぬエキストラ 視郎

エキストラ同士の座敷冷奴 備後

さゝやかに風吹いてある夏の宵 治美

気まぐれに何を語るか夏の宵 丈博

冷奴すぐに崩して一人箸 とんこう

第22回放送人句会

◇平成22年9月8日(水)

◇於：赤坂・麦屋

◇出席：伊藤視郎、荻野慶人、豊田まつり、新村もとを、林備後、堀川とんこう、松尾馬笑、森治美、西川阿舟(九人)

◇不在投句：山泉ぼん太

◇兼題：渡り鳥、コスモス、龍馬

泣くほどのことかと揺れて秋桜 まつり

投げ入れしコスモスを抱く備前焼 治美

玉碎の北の島から渡り鳥 視郎

鳥渡る傍に富士の赤黒く 備後

鳥渡るスカイツリーの高き空 阿舟

コスモスを七万本と数えけり 視郎

自づから揺れてコスモス風を待つ ぼん太

一ト雨を降らせて高く鳥渡る 備後

コスモスのジャングルとなる庭であり 視郎

身に入みて龍馬が妻のほつれ髪 ぼん太

赤錆の鉄路が似合ふ秋桜 馬笑

コスモスの丘で三寿がかくれんぼ 慶人

ハネムーンはじめは龍馬天の川 阿舟

渡り鳥見送り紅茶冷めてをり もとを

七三に決めて龍馬の菊人形 もとを

東京の寝ねぬ夜を鳥渡らむか まつり

秋光へ手かざして見る龍馬像 ぼん太

東南風や港見下す龍馬像 視郎

黒潮に嘯く龍馬秋高し 阿舟

コスモスの白を数えてしやがむ君 とんこう

彼方には龍馬も見しか月の海 治美

コスモスの揺らぎに誰か隠れてる もとを

秋日傘差して龍馬の墓詣 備後

発電の風車を越えて鳥渡る もとを

「龍馬伝」見る気ないぜよ秋の宿 馬笑

廃線にコスモス揺れる能登路かな 馬笑

飾るならコスモスが良しわが棺 とんこう

心音を指に残し朝鳥渡る まつり

コスモスの寄ると触ると嘆き合ひ もつり

一畝はコスモス咲かせ野菜畑 阿舟

コスモスや水車はまはる日は昏る 備後

秋桜や百恵の歌のまゝに揺れ 阿舟

鳥渡る気配なき秋森さわぐ とんこう

平成の龍馬はいずこ秋の浜 慶人

鳥渡る入江竜馬と眺めけり とんこう

次回放送人句会

11月9日(火)午後6時半

(曜日が変わっています)

於：麦屋 (Fax 03-3586-0056)

兼題：時雨、西の市、ギャラ(季語を入れて)

- 【あ】青木裕子 赤井朱美 秋田完 秋山豊寛 雨宮望 新井和子 【い】石井彰 石井清司 石井ふく子 石高健次 石橋冠
磯野恭子 磯村健二 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩 井上良介 岩澤敏 【う】上田千秋 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
【え】江口展之 遠藤利男 遠藤ふき子 遠藤雅充 【お】大蔵雄之助 太田敬雄 大西康司 大西文一郎 大原いこ 大山勝美
大類啓 大脇明 岡弘道 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明 小河原正巳 沖野暁 荻野慶人 小田久榮門 織田晃之祐
【か】加賀美幸子 各務孝 片岡敬司 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫 加藤迪 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀 加納孝夫
鎌内啓子 上安平冽子 鴨下信一 川口健一 川口幹夫 河邑厚徳 河村正一 【き】岸田功 北川泰三 北川信 北出晃 北村美憲
北村充史 木村栄文 木村成忠 【く】楠美昌 工藤英博 隈部紀生 【こ】小池勝次郎 河野尚行 児玉清 児玉孝光 児玉久男
後藤和晃 小南武朗 近藤晋 今野勉 【さ】斎藤伸久 斎藤秀夫 斎明寺以玖子 酒井美樹男 寒河江正 坂元良江 桜井均
佐々木彰 佐々木欽三 佐藤年 澤田隆治 沢田隆三 【し】重延浩 重村一 静永純一 嶋田親一 清水満 下崎寛 下重暁子
城菊子 【す】菅野高至 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典 鈴木克明 鈴木典之 鈴木道明 須磨章 【せ】せんぼんよしこ
【そ】曾根英二 【た】高島秀之 高戸辰一 高橋一郎 高橋啓 滝大作 武本宏一 田澤正稔 田中昭男 田中直人 田中則広
田原英二 田原茂行 【ち】千葉勉 【つ】辻本昌平 露木茂 鶴橋康夫 【と】土居原作郎 堂本暁子 戸田佳太 外崎宏司
豊田由紀子 豊原隆太郎 【な】中崎清栄 中澤忠正 中島僚 中田美知子 永田浩三 長沼士朗 永野敏一 中村敦夫 中村克史
中村季恵 中村耕治 中村敏夫 中村美美子 中山和記 難波秀哉 【に】新村もとを 西ヶ谷秀夫 西川章 二宮文彦 丹羽美之
【の】信井文夫 【は】荻野靖乃 橋本潔 林健嗣 林裕史 原由美子 原田庸之助 【ふ】深町幸男 藤井チズ子 藤田晋也
藤久ミネ 【ほ】星田良子 堀川とんこう 【ま】前川英樹 松井泰弘 松尾羊一 松平定知 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭
【み】三上義智 水上毅 水野憲一 三村景一 三村千鶴 宮川鏡一 三宅恭次 明神正 【む】村上光一 村上雅通 村上佑二
村田亨 【も】守分寿男 諸橋毅一 【や】八木康夫 矢島良彰 藪内広之 山県昭彦 山崎隆保 山崎裕 山路家子 山田尚
山田良明 大和定次 山根基世 【よ】横沢彪 横山英治 吉澤保 吉永春子 吉村直樹 吉村光夫 【わ】和田智允 渡辺敏史

新会員紹介

豊原隆太郎さん
元TBS制作局、広報部。
昼ドラ『ポーラテレビ小説』枠で
の演出、および『8時だよ、全員
集合!』などの演出。
放送人句会々員。
下崎寛さん

NPO日中人材技術交流協会事務局
長。「理事長大山勝美さんの下で日
韓中放送人の文化交流の支援、東ア
ジアを視野に入れた方向を・・・」
田中則広さん

現NHK放送文化研究所。専門分野
朝鮮半島分析、メディア史。韓国放
送公社(KBS)国際局を経て日本
放送協会(NHK)。

訃報

富永卓二さん
5月10日 舌下腺がんで逝去。74歳で
した。元フジテレビ編成局長職。主
な演出作品は「砂の器」「北の国か
ら」「オレゴンから愛」など。フジ発
ドラマの主要な演出家で硬質な作風
で知られていました。 合掌

事務局に「放送人の会」の主旨、活
動内容をコンパクトにまとめたり
フレットを用意しております。会員
に推薦したい、会員になりたい、そ
んな方がありましたらご一報くださ
い。リーフレットをお送り致します。

編集後記

新聞記事によると、なんでも北区の
民家に小さな資料館があるそうだ。20
代、30代のボランティアが4年前から
「戦争体験放映保存の会」をたちあげ
証言映像の録画DVDと手記類を合わ
せて公開している。会の尽力で元兵士
から兵士へ呼びかける形で証言の輪は
広がる。合言葉は「とも(戦友)よ、
語ってから死のう」◆またNHKが進
めているプロジェクト《戦争証言アー
カイブス》では従軍経験を、銃後体験
を語る映像がウェブ上で閲覧できる。
来年の開戦70周年までに1000人の
証言を採集するという。番組制作で集
めたインタビューを未放送も含めて
収録、戦場名や年表からの検索も可能
で、日本人の戦争体験全体を、体系的
・総合的にクロスできる設計だという。
◆戦後生まれが人口の4分の3を超え、
太平洋戦争の戦場から帰還して今なお
健在な人は推計上40万人前後、194
5年の最後の徴兵検査対象者(19歳)
にしても今や84歳だ。今夏の特番編成
は膨大な証言集や隣接するドラマ表現
で、隠されていた戦争民俗としての現
代史が浮き彫りにされた◆問題は「龍
馬伝」や「坂の上の雲」の「その後」
とどうつながるか、つながらないか、
だろう。日本のアイデンティティーに
深くかかわる戦争体験がルーツ探しの
コアになる。その旅はじつは始まった
ばかりなのだ、と思いたい。(M)